

# 早稲田社会学会ニュース

第64号

2024年10月28日発行

早稲田社会学会事務局  
〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1  
早稲田大学文学部 社会学研究室内  
Tel: 03-5286-3742  
E-mail: socio-office@list.waseda.jp  
URL : <http://www.waseda.jp/assoc-wss/>

## 今回のニュースの内容

1. 第76回早稲田社会学会大会の報告
2. 第76回早稲田社会学会総会の報告
3. 第45回早稲田社会学会研究例会の報告
4. 2024年度研究助成について
5. 2023年度研究助成 研究報告
6. 入退会者のお知らせ
7. 学会費納入のお願い
8. 事務局よりお願い

## 1. 第76回早稲田社会学会大会の報告

第76回となる今年度の学会大会（早稲田社会学会と早稲田大学総合人文科学研究センターの主催）は、新型コロナウイルスをめぐる状況も踏まえ、2024年7月6日（土）、ZOOMミーティングを用いたオンライン開催となりました。

報告者および報告題目、司会者、討論者は次のとおりです。

一般研究報告（10:30～12:00）

報告者：

永島郁哉（早稲田大学）

「管理される共生——「多文化共生」をめぐる法務省の論理の構造」

河野昌広（早稲田大学）

「都市の自転車の道、走る道、歩く道 ——移動に伴うコンフリクトと公共的秩序」

清水拓（早稲田大学）

「炭鉱労働者の手工的スキルをいかにして捉えるか——坑内労働経験に関する聞き取り調査の方法論的検討」

司会：野坂真（青森公立大学）・大坪真利子（早稲田大学）

シンポジウム (13:30~17:00)

テーマ：社会の危機と社会学の危機2024—「食」をめぐる社会学

報告者：

柄本三代子（東京国際大学）「食べることから考えるとはどういうことか」

安藤丈将（武蔵大学）「農の社会的支援をどう論じるか：ケアワークとの類推から」

福永真弓（東京大学）「サーモンになった魚たち：食のエンジニアリングと惑星倫理」

討論者：草柳千早（早稲田大学）・平野直子（駒沢女子大学）

司会：栗原亘（東洋大学）

本年度のシンポジウムは、今後数年にわたる共通テーマとなった「社会の危機と社会学の危機」の第一弾企画「「食」をめぐる社会学」であった。

まず柄本三代子氏の第一報告では、「食」をめぐる生活者たちの多様かつ具体的な実践や経験の検討を通して、合理的・非合理的といった形で明確に割り切ることのできない「食べること」をめぐる現実の生々しい姿が提示された。そこにおいては、「科学」「倫理」「安全」などといった基準に対し、ただちにその限界と不可能性をつきつけることこそがまさに「食べる」という営みの実像であり、そしてそうであるがゆえに、生活者たちはその都度、その場ごとで、「何を食べ、何を食べないか」を決めていく他ないという切実な事情が確認された。本報告では、こうした生活者たち自身の日常に埋め込まれた「食」のあり方に改めて着目することの重要性が強調されたといえる。

続く安藤丈将氏の第二報告では、「農」をめぐる社会的支援の観点からの議論が展開された。具体的には、まず、「農」という営みをめぐる近年の諸議論が、もっぱら「国家の食糧安全保障」の観点にのみ立脚する傾向にあり、農民とその他の人々との間の関係性から「農」の実践とその支援を正当化するという社会（学）的な観点を欠いていることに対する問題提起がなされた。そして、こうした問題を乗り越えるための方策の1つとして、エコフェミニズムやケアフェミニズムの議論を参照し、「農」を一種のケアワークとして位置づけるという方向性がありうるのではないかとの見解が、特に有機農業の産消提携運動に関する安藤氏自身の堅実な研究成果をめぐる考察のもとで提示された。

福永真弓氏の第三報告においては、ニジマスという「サーモンになった魚」の存在論的变化を手がかりに、現代的な食のエンジニアリングをめぐる多様なアクターが形成している複雑な絡まり合いを可視化することが試みられた。「サーモンをつくる」地域の人びとの営みから出発し、さらに食のテクノロジーの発展と気候変動との関係、そしてそこから生じてくる「食の倫理」と「惑星倫理」の交差といった、多様なスケールを横断して広がる論点の連なりが、環境社会学や環境倫理学はもちろん、さらに科学技術論（STS）やマルチスピーシーズ人類学などにおける昨今の議論の展開を踏まえたパースペクティブのもとでつまびらかにされた。そして、以上の議論を踏まえた上で最後に、「多種間に生きるための倫理」の構築に関する構想も提示された。

以上の報告の後、ディスカッションがおこなわれた。まず討論者の草柳千早氏と平野直子氏からのコメント・質問がおこなわれ、その後、その他の参加者たちも交えた質疑応答がなされた。今回は、とくにアーリーキャリアの参加者たちからの積極的な発言が相次いだ点が印象的であった。報告およびディスカッションで扱われた論点は実に多岐にわたり、そのほとんどについて明確な答えは出なかったといえるが、しかしそもそも今回のシンポジウムの目的は、何か一致した確定的な答

えを作り出すことよりも、むしろ、これから展開されるべき議論の「種」をまくことにあった。そうした点を考慮すれば、今回のシンポジウムはまさにその目的に沿った成果をあげることができたのではないと思われる。登壇者やその他の参加者たちの、今回のシンポジウムを経たうえでの今後の議論の展開にも期待したい。（東洋大学 栗原 亘）

## 2. 第76回早稲田社会学会総会の報告

第76年回早稲田社会学会総会は、7月6日(土)学会大会終了後、17:00から17:45まで、ZOOMミーティングを用いてオンラインで開催されました。

### 1. 議長選出

石倉義博会員（早稲田大学）が選出された。

### 2. 議事

#### 2-1 報告事項

1) 活動報告（2023年7月～2024年7月）（各担当理事）

2) 2024年度研究助成の申請について（庶務担当理事）

申請はなかったこと、また2023年度研究助成の報告書が提出されたことが報告された。

3) その他

特になし。

#### 2-2 審議事項

1) 2023年度決算の件（会計担当理事）

※別添の総会資料をご参照ください。

2) 会計監査報告の件（監事）

3) 2024年度予算の件（会計担当理事）

※別添の総会資料をご参照ください。

4) その他

特になし。

## 3. 第45回早稲田社会学会研究例会の報告

第45回研究例会が、以下の通り開催されました。

テーマ：「持続可能な食」に向けた食農倫理学と環境社会学

日時：2024年5月18日（土）14:00～17:00

会場：オンライン（Zoom）開催

司会者：西城戸 誠（早稲田大学）

報告者および題目：

太田和彦（南山大学） アジア太平洋圏の食農倫理学の動向

藤原なつみ（九州産業大学） 食にまつわるテクノロジーの社会的受容性：代替肉と培養肉を事例として

## 研究例会報告

2024年度のシンポジウム―「食」を考える―に先立ち、研究例会では、「食」をめぐる、今ど  
のようなことが起きているのかについての現状を確認する作業を行うことになった。第一に、食  
（特に「農」や「土」をめぐる営み）にまつわる状況に関して、その倫理的な側面を軸にしなが  
ら論じてきた太田和彦氏から「アジア太平洋圏の食農倫理学の動向」というタイトルで報告して  
いただいた。食べ物の生産、流通、消費、廃棄（フードシステム）に関わる倫理的な問題を扱う  
応用倫理学の一つである食農倫理学は、二項対立で語られがちなテーマ、特に生じているジレン  
マについて詳細化する学問であり、例えば、家畜福祉というテーマでは動物福祉を尊重する必  
要があるものの、コスト高となり食品の値上がりが高所得者の負担を増やすといったジレン  
マが議論されることが指摘された。また、食の倫理学に関する研究者と実務家のための学  
際的なプラットフォームであるアジア太平洋圏食農倫理会議における議論とそれによる  
政策化の具体例が報告され、さらに食農倫理研究というハイブリッド型の研究領域にお  
ける、倫理学・社会学・政策学・文化人類学の役割が提案された。

第二に、食にまつわるテクノロジーをめぐる状況に関して、具体的な現場で消費者調査も  
行っている藤原なつみ氏から「食にまつわるテクノロジーの社会的受容性：代替肉と培養肉を  
事例として」というタイトルで報告をしていただいた。まず、気候変動問題・タンパク質危  
機・動物福祉の観点から着目される食肉代替食品がどのように人びとに認識され受容さ  
れるのか、先行研究では、日本人の培養肉の受容性に影響を与えるのは不自然さの認  
識とされていることが提示された。次に、持続可能な消費を考える上で合理的選  
択理論に代わり社会的実践理論の視点を用いて実証データによる分析を行い、何を  
「肉を食べること」と意味づけているかという価値観（柔軟性）によって、代  
替肉（大豆ミート）や培養肉の受容性に差があることが示された。

管見の範囲から述べれば、第一報告からは、食を巡る議論が学際的であり、倫理学・  
政策学・人類学などの議論とどのように組み合わせ、学術的かつ実践的な課題に  
対応していくのか、従前の社会学の枠組みを再考する必要性が示唆されたとい  
える。第二報告に対しては、シンポジウムのパネリストから社会的受容性とい  
う科学技術社会論的な議論自体を採用することが社会的ではないという意見もあ  
ったが、対象や社会の常識を相対化、対抗するだけでは「社会学は批判ばかり  
で生産性がない」と囁かれるだけであろう。従前の社会的な概念や分析手法が  
多様な学問領域で消費されている「社会学の危機」の中で、しかも進化が著  
しい食のテクノロジーの分野においては特に人文・社会・自然科学と接続しな  
がら、その中で社会的な知見を析出することが重要なのではないだろうか。も  
っともこれとは逆のベクトルも社会学的研究の存続であるかもしれない。今  
後の会員の議論に委ねたい。

（早稲田大学 西城戸 誠）

## 4. 2024年度研究助成について

2024年度の申請について申し込みはありませんでした。

なお、研究助成の趣旨に賛同される方からのご寄付も募っております。寄付については事務局に  
お問い合わせ下さい。

## 5. 2023年度研究助成 研究報告

昨年度の研究助成の対象は、次の研究でした。

研究題目：都市の自転車の道、走る道、歩く道の研究

研究者：河野昌広（早稲田大学）

助成額：100,000円

研究成果の報告 都市の自転車の道、走る道、歩く道の研究 河野昌広（早稲田大学）

報告者はこれまで、地理学における空間論的転回や移動論的転回をふまえ、移動空間である道に着目し、その空間特性について考察を行ってきた。特に早稲田大学道空間研究所では、四国遍路を中心とした巡礼の道をフィールドとして、道空間の多元性や道の豊かさについて考察してきた。巡礼の道は、札所、巡礼者(移動者)、沿道住民(定住者)といったアクターからなり、移動者以外にも様々なアクターが存在する。それらのアクターにより多元的な道空間が構成されていることが先行研究では明らかになってきた。

本研究では道空間の事例として、皇居周辺の道や、都市型マラソン大会のコースの道、河川沿いの道などをとりあげて、移動者としてのランナーや歩行者、自転車、自動車、そして移動者以外の沿道関係者、大会関係者などのアクターによる、コンフリクトやそれを回避する相互行為のパターンに着目したうえで、公共的秩序がどのように形成され維持されているのかについて考察を行った。

本研究でとりあげた皇居周辺の道では、歩行者とランナー、ランナー同士、自転車と通行者、自転車と車など、アクター間のコンフリクトが多発している。それに対して、コンフリクトを回避するための明文化されていないマナーや相互行為のパターンが存在していることが、ウェアブルカメラを用いた調査により明らかになった。その一方で、コンフリクトを回避するための、ランナーや自転車のマナーやルールの策定や明文化も、行政や関係者により構成された組織により、行われてきた。それはマナーやルールの策定や明文化のみならず、それらの移動者の視点を生かした上で、コンフリクトを回避するために、新しく道の整備(代官町通り)が行われ、新たな道空間の意味づけが行われることとなった。

都市型マラソン大会のコースの道では、ランナー同士の記録をめぐるコンフリクトが生じる可能性があるが、その一方で、一時的な共同体とも呼ぶべき関係性がランナー間やランナーと沿道の観戦者との間で生じることがある。日本のトップランナーの川内優輝は、フルマラソンを2時間で走るランナーの世界と、4時間で走るランナーの世界を比較した上で、4時間ランナーの世界が、沿道とのコミュニケーションがあり、ランナー同士の励ましや助け合いがあり、みんなで同じ目標を達成しようと頑張っていることに感動したと述べている。報告者による都市型マラソン大会のウェアブルカメラを用いた調査においても、4時間ランナーにおけるそのような関係性が観察された。V.ターナーは巡礼において巡礼者同士で一時的に形成される共同体的なものをコミュニタスと呼んだが、4時間ランナーにおけるこのような関係性はコミュニタスと呼んでもよいであろう。

## 6. 入退会者のお知らせ

理事会において以下1名の入会が承認されました。（以下、敬称略）

2024年5月18日理事会

永島郁哉（早稲田大学大学院文学研究科）

理事会において以下2名の退会が承認されました。（以下、敬称略）

2024年5月18日理事会

田所承己（帝京大学）

品田知美（城西国際大学）

ご逝去

佐藤慶幸先生（名誉会員）

正岡寛司先生（名誉会員）

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

なお、先生方の追悼、本学会へのご尽力につきましては、『社会学年誌』66号（2025年3月刊行予定）にて掲載いたします。

## 7. 学会費納入のお願い

今年度の学会費を未納の方におかれましては、重ねて学会費をお振り込みくださいますようお願い申し上げます。

年会費：一般会員 5,000円 学生会員 3,000円

口座番号：00100-3-38020（郵便振替）

加入者名：早稲田社会学会

複数年度分の会費を納入される場合、および転居・異動などがあった場合には、別途メールにてその旨をお知らせください。なお、年会費の納入記録についてのお問い合わせなどがありましたら、事務局（socio-office@list.waseda.jp）までご連絡ください。

## 8. 事務局よりお願い

### ■事務局への連絡はできるだけメールでお願いいたします。

コロナ禍以後、事務局運営上の実務の多くをオンラインで行っております。学会事務局へのご連絡等は、できるだけ郵便でなくメールにてお願いいたします。郵便の場合、対応が大変遅れる可能性があります。いろいろとご不便をおかけいたしますが、ご理解とご協力のほど、よろしく願いいたします。

### ■学会費の納入にご理解とご協力をお願いいたします。

近年、学会費納入率が低下しており、学会運営に支障をきたしております。特に2020年度以後、コロナ禍で、学会費の納入状況が大変低下しました。会員の皆様には、引き続き、早稲田社会学会活動にご理解いただき、会費を納入いただけますようお願いいたします。

以上